
アワニコ

陰照

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アワニコ

【コード】

N0053D

【作者名】

陰照

【あらすじ】

なぜ僕は追われているのか一体誰に追われているのかありふれた日常から踏み出したほんの一步それが間違이었다と気づいた時は…

第一話（前書き）

読んでくれた方、ありがとうございます。
しみたいと思います。

不定期連載で楽

第一話

…なぜ僕は追われているんだろう…

…本当に必死で逃げまわっている時というのは、その理由さえ忘れてしまうものらしい…。

…追っ手の叫び声・足音・殺気が少し遠ざかったようだ。

追いかける足より逃げ足の方が速いというのは、生き物の七不思議の1つに加えてもいいのではないか。

…少し考える余裕が出来たらしい。息も整ってきた。

今のうちに思い出してみることにしよう。。。

この物語がはじまってしまったワケを…

11月。ようやく涼しくなってきた。

とはいえ、シャツを半袖にするか長袖にするか、毎朝迷う日々だ。

ここ最近の平均気温26度。今の時期が一番過ごしやすいかもしれない。唯一の欠点と言えば、紅葉が見れないということか。

街のメインストリートは、修学旅行生や、外国人の観光客で溢れている。『国際通り』とは、よく言ったもんだ。

並ぶお店の6割がお土産屋で、3割が食べ物屋（多分それぐらい）。

残り1割の中に、僕が働いている店がある。

商品は主に民族楽器。

それも、この地に古くから伝わる『五線』という弦楽器だ。

何年か前に、有名なミュージシャンがこの五線を使ったことで、一気に知名度が上がった。

当然、流行に乗った五線はよく売れ、店は繁盛した。

しかし、最近はさっぱりだ。流行りは過ぎ、値段が高いことも手伝って、買う人が激減してしまった。

前置きが長くなってしまったが、要するに暇である。

3万円程度の五線なら一日一本くらいは売れるが、10万円以上の代物となると、そうそう売れるものではない。なので、滅多に売れない物を買っていくお客さんというのは、印象に残るものだ。そんな人に限って、変わり者が多い…というのもある。

そして、この日の客も、まさにそういう感じだった… 夕方。

朝から我慢していた雨雲が、ついにベソをかきだした。

街全体が薄暗くなり、あつという間に歩行者はいなくなつた。

僕はレジが置いてあるテーブルに肘をついて、窓越しに外を眺めていた。

溜め息が止まる気配は無い。

もう1人の従業員が、何時間も動かないレジを見つめながら言う。
「もう店閉めて飲みに行くか！」

これは彼のログセである。
閉店時間まではまだ数時間ある。

にも関わらず、
「行くか！」　と言ってしまっ。

実際にはそんなことはしないのだけど…　　単なる暇潰しの方
法の一つだ。

あれやこれやと、酒やつまみの話して盛り上がっていると、ふ
と、店のドアの開く音が…。

第二話

その客の印象を一言で言うなら、『老人』という言葉がピッタリだった。

背は結構高い気もするが、背中はかなり曲がっていて、真っ白で長い髭、色褪せたセーター、小豆色のニット帽を浅くかぶって、杖までついている。老人に必要な物を全てまとっている感じだ。

老人は狭い店内をグルリと見回した後、十数本の五線が並ぶコーナーへゆっくり近づいていった。

そして、上の段に並んでいる比較的値段の高い物を、一つ一つ手に持って見ている。

その間、僕らの問いかけには一切反応を示さず、また、音を鳴らそうともしない。普通は、値段の高い楽器を見る人なら、必ず試奏して音色を確かめるものだ。

これはただの冷やかしかなあ　　と思い始めた時、一つの五線を持った老人が僕に近づいてきた。

「これを頂こう。」　　そう言って持ってきた五線は、棹に『エーマクルチ』という、最高級の素材を使った、50万円の代物だった。　　最近、腕利きの職人さんから仕入れたばかりだったのだが、その音色はまさに、「心の琴線に触れる」という感じだった。

その五線が、こんなに早く売れるとは夢にも思わなかったので、

一瞬なにかの冗談ではないかと疑ってしまった。

老人は、

「現金はお家にあるから、後でその五線を届けてくれんかね。ワシにはちと重いのでなあ。」

家はすぐ近くだから　と言って、住所の書いてある紙を残して、老人はこの店を後にした。

これで当分は売り上げの心配はいらないと、もう1人の店員ははしゃいでいたが、五線を届けに行かなきゃいけない僕としては、心配事だらけだ。　　なにしろ50万円もの大金を持ち歩かなきゃならないのだから…。

第三話

店を出る頃には、辺りは薄暗くなっていた。

まだ雨がぱらついていたので、五線の入ったハードケースをビニールで巻いておいた。

老人の残した住所によると、ここから歩いて10分程度で着くはずだった。

しかし、いざ歩いてみると、細い路地を何回も曲がったり、行き止まりに3回も出会ったりと、その道のりはちょっととした迷路のようだった。

やがて、こじんまりとした森のような公園が現れた。

公園の真ん中には、立派なガジュマルの樹が立っている。

太い枝から垂れた何本もの蔦がまるで髭のようで、さっきの老人に似てるな　　と　　思　　っ　　て　　し　　ま　　っ　　た　　。

肝心の老人の家は、公園のすぐ側にあった。

表札には『比嘉　宗徳』と書いてある。

あの老

人の本名だ。

表札のすぐ横には、『比嘉宗徳 古典音楽研究所』という木造りの看板が掛けてあった。

古典音楽： 要するに、五線の先生をしているのだろう。

見るからに立派な家だ。 結構有名な先生なのかも知れない。

少しの間、この大きな家を眺めていたが、ふと、あることに気づいた。

電気が点いていない。 もうすっかり陽は暮れているのに、家の中は真っ暗だった。

インターホンを鳴らしてみる… ピンポーンという音が、やけに虚しく響いた。

イヤな予感が当たったらしい。

老人は留守だ。

ひとり暮らしがどうかは知らないが、他に人のいる気配もない。

公園のベンチにでも座って時間を潰そうかとも思ったが、電灯ひとつ無い夜の公園は不気味だった。

老人の電話番号はケータイではなかったので、連絡のとりようがない。

明日出直そう…　　そう決心して、もと来た道へと歩を進めた。

ずっとハードケースを持っていた左手に、少し痺れを感じた。

そういえば、いつの間にか雨が止んでたな、…。

翌朝。

昨日の僕の『イヤな予感』がハズレていたことを知った。

老人は家の中にいた…。

いや、その表現は適切ではないな。

『この世』にはいなかったのだから…

テレビの中でその事実を話しているアナウンサー…

その無表情な瞳が、僕を見ている気がした…。

第四話

…数日後。

僕は再びあの老人の家の前にいた。

あの日、老人が亡くなったことを知った僕は、すぐにうちの店のオーナーに電話をした。

あの老人が、亡くなる少し前にうちの店に来たことを警察にどう話そうか、相談したかった。

「そういうことにはあまり関わらない方がいい。君も警察から何か聞いてくるまでは黙っていなさい。」

これがオーナーの返答だった。

「せ

つかく売り上げが増えると思ったのになあ…」
こう呟く声が聴こえて電話は切れた。

人が死んだというのに金の話か…。

それでも、すぐに警察がうちの店にも調べに来るだろう、それまでは大人しくしていようと思っていた。

しかし、数日経っても警察が訪ねて来ることはなかった。

僕は気になった。

老人が何故死ななければならなかったのか。

自殺なのか、他殺なのか。

もし自殺だとしても、これから死のうという人間が、あんなに高価な楽器を欲しいと思うだろうか…。

そんなことばかり考えているうちに、あの老人の家をもう一度見てみたくなったのだ。

…老人の家はほんの数日の間に、随分印象が変わってしまっていた。

玄関を中心に、立ち入り禁止の立て札がいくつか置いてあり、黄色いテープのようなものが家全体を囲んでいる。

初めてこの家を見た時も真っ暗だったが、今はもっと暗闇の中にあるような、どんよりとした不気味なオーラを放っているような感じがした。

…警官はいないようだ。

思わず一歩踏み出したときだった。

「ねえ」

…!!?!

不意に背後から声がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0053d/>

アワニコ

2010年12月18日15時02分発行